

サポートの互恵性と精神的健康の関連に関する研究 - 個人内および個人間発達の観点からの検討 -

谷口 弘一

広島大学大学院生物圏科学研究科

A study of the relationship between support reciprocity and mental health: An examination from the viewpoint of intra- and interindividual development

Hirokazu Taniguchi

*Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University,
Higashi-Hiroshima, 739-8521, Japan*

要 旨

第 1 章 サポートの互恵性と精神的健康の関連に関する研究の現状

これまでのソーシャル・サポート研究の多くは、他者から受け取るサポートが心身の健康に対してどのような役割を果たすのかについて検討を行ってきた(Barrera, 1986; Cohen & Wills, 1985)。一方、近年では、ソーシャル・サポートが社会的相互作用を通じて交換される資源であるという観点から、サポートの互恵性の効果に対しても注意が向けられるようになってきた(Buunk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993; Rook, 1987)。ここでいうサポートの互恵性とは、ある個人が他者から受け取ったサポートと同じ程度のサポートを他者に返報することを意味している。先行研究の多くからは、サポートの互恵性が高いほど、すなわち、受け取るサポートと与えるサポートが同程度であるほど、心身の健康状態が良好であるということが示されてきた。

Antonucci & Jackson (1990)は、サポートの交換や互恵性の評価が個人の特定の発達段階(intraindividual development)と二者間の関係の特定の発達段階(interindividual development)によって決定されることを指摘している。前者は社会的関係に参加している個々人の発達段階を、後者は社会的関係それ自体の発達段階をそれぞれ表している。例えば、若い母親と新生児の関係では、母親は他者との社会的関係の長い歴史を持っているが、新生児はそうした先行経験を持っていない。すなわち、両者はそれぞれが異なる発達段階で関係に参加していることになる。同時に、その関係は両者にとって新しいものであるため、関係そのものは関係発達の初期段階にあるといえる。親子関係を対象にした幾つかの実証的研究からは、これら 2 つの要因が親子間のサポートの交換や互恵性の評価に対して影響を与えることが見いだされている(e.g., Levitt, Guacci, & Weber, 1992)。

本研究では、友人関係を対象にして、個人内および個人間発達の観点からサポートの互恵性と精神的健康との関連について検討を行った。友人関係は親子関係とは異なり、同年齢の者同士で形成される場合が多い。そこで、個人内発達の影響に関しては、児童期と青年期という2つの異なる年齢層の友人関係を取り上げることによって検討を行った。一方、個人間発達の影響に関しては、約1年間に渡る縦断的手法を用いることによって検討を行った。

第2章 サポートの互恵性に対する個人内発達の影響

本章では、児童期と青年期の2つの年齢層の友人関係を対象にして、サポートの互恵性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響を検討した。小学6年生317名と高校1年生340名が調査に参加し、抑うつならびに友人関係におけるサポート授受を測定する尺度に回答した。分析の結果、小学生よりも高校生において、サポートの互恵性が抑うつと有意な関連を持っていた。すなわち、高校生においてのみ、友人から受け取るサポートと友人に与えるサポートが同じ程度である場合に抑うつの程度が低いことが示された。これらの結果は、個人内発達が友人関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関連に影響を与えていることを示しており、個人内の発達段階が進展するにつれて、友人関係におけるサポートの互恵性の評価が変化することを示唆するものである。

第3章 サポート授受の規定因に対する個人内発達の影響

第2章の研究結果から、友人関係におけるサポートの互恵性の評価が個人内発達によって影響を受けることが示された。互恵性の評価が実際のサポート授受に基づいてなされるということを考えると、サポート授受そのもの、あるいは、サポート授受の規定因に対しても、同様に個人内発達の影響が認められるかどうかを検討する必要がある。そこで、本章では、サポート授受を規定する要因として親の養育態度と社会的スキルの2つを取り上げ、これら2つの規定因とサポート授受の関連が個人内発達によってどのような影響を受けるかについて検討を行った。調査対象者は第2章の研究と同様であった。分析には親の養育態度、社会的スキル、および、友人とのサポート授受に関する尺度を用いた。結果は以下の通りであった。

小学生においては、親の養育態度が友人とのサポート授受に対して社会的スキルを経由した間接的な効果を持っていると同時に、直接的な効果も併せ持っていた。一方、高校生においては、親の養育態度が友人とのサポート授受に対して間接的な効果を持っているだけであった。すなわち、個人内の発達段階が上がるにつれて、友人とのサポート授受が、親の養育態度よりも友人との経験を通じて学習される社会的スキルによって規定されるようになっていた。

一般に、親子関係では相手の欲求に基づいて交換が行われるのに対して、友人関係では互恵的な規範に基づいて交換が行われることが指摘されている。従って、ここで示された結果は、個人内の発達段階の上昇に伴って、友人とのサポート授受がより互恵的な規範に基づいたものになることを示唆している。個人内発達によるこうしたサポート授受の変化が、第2章の研究で見いだされた互恵性の評価、並びに互恵性と精神的健康との関連の変化を生じさせていると考えられる。

第4章 サポートの互恵性に対する個人間発達の影響

上述した2つの研究から、個人内発達が友人とのサポート授受や互恵性の評価に影響を与えることが示された。第4章では、もう一つの重要な要因である個人間発達に注目し、友人関係自体の発達段階によって、サポートの互恵性と精神的健康の関連がどのように変化するかについて検討を行った。調査対象者は小学6年生126名、高校1年生449名であった。彼らは無気力や抑うつなどのストレス反応および友人関係におけるサポート授受を測定する尺度に回答した。調査は1学期と3学期の2度に渡って実施された。分析の結果、小学生においては、いずれの時点においてもサポートの互恵性がストレス反応の程度と有意な関連を持っていなかった。一方、高校生においては、1学期の時点では両者の間に有意な関連が認められなかったが、3学期の時点では有意な関連が認められた。すなわち、高校生において、友人との関係が短いときよりも長いときに、互恵的なサポート授受がストレス反応を低下させていた。これらの結果は、個人内の発達段階すなわち個人内発達だけでなく、関係自体の発達段階すなわち個人間発達もサポートの互恵性評価に影響を与えることを示している。

第5章 サポート授受の規定因に対する個人間発達の影響

第4章の研究結果から、個人間発達が友人とのサポートの互恵性評価に影響を与えることが示された。そこで、第5章では、友人とのサポート授受を規定する要因が個人間発達によってどのように変化するかを検討した。サポート授受を規定する要因には、一般的サポート認知と関係特殊的サポート認知の二つを取り上げた。前者は、主に、幼少期の養育者との関係を通して形成される対人関係全般のサポータティブ性に関する認知であり、後者は、親子関係以外の対人関係における様々な経験を通して形成されるその関係独自のサポータティブ性に関する認知である。個人間の発達段階が進展するにつれて、すなわち友人関係が長くなるにつれてその相手との経験が増えることから、友人とのサポート授受は一般的サポート認知よりも個別的サポート認知によって規定されるようになることが予測される。調査対象者は第4章の研究と同様であり、個人間発達の影響が認められた高校生のみを分析の対象とした。結果は以下の通りであった。

1学期では、友人とのサポート授受が一般的サポート認知によって直接的に規定されていると同時に、関係特殊的サポート認知を経由して間接的に規定されていた。一方、3学期では、友人とのサポート授受が一般的サポートからは直接的に規定されておらず、間接的に規定されているだけであった。これらの結果は、個人内発達と同様に個人間発達が友人とのサポート授受を変化させることを示唆するものである。こうしたサポート授受の変化が第4章の研究で見いだされた互恵性の評価、並びに互恵性と精神的健康の関連の変化を生じさせていると考えられる。

第6章 総合考察

以上4つの研究から、個人内発達および個人間発達が、友人関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関連、並びにサポート授受の規定因に対して影響を与えていることが示された。すなわち、友人関係におけるサポートの互恵性が精神的健康と関連を持つためには、まず第一に個人内の発達段階が進展していること、次いで、友人関係自体の発達段階が進展していることが必要であることが明らかとなった。これらの結果から、サポートの互恵性と精神的健康との関連を検討する場合には、個人内および個人間発達の2つの要因を考慮に入れることが重要であると言える。今後の課題と

しては、例えば、サポートの交換規範に関する個人の認知などを取り上げることによって、個人内および個人間発達がサポートの互恵性と精神的健康との関連に対して、どのような過程を通して影響を与えるのかそのメカニズムに関してより詳細に検討する必要がある。

引用文献

- Antonucci, T. C., & Jackson, J. S. (1990) The role of reciprocity in social support. In B. R. Sarason, I. G. Sarason, & G. R. Pierce (Eds.), *Social support: An interaction view*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 173-198.
- Barrera, M. Jr. (1986) Distinction between social support concepts, measure, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Buunk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M., & Hopstaken, L. E. M. (1993) Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 801-811.
- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985) Social support, stress, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Levitt, M. J., Guacci, M., & Weber, R. A. (1992) Intergenerational support, relationship quality, and well-being: A bicultural analysis. *Journal of Family Issues*, 13, 465-481.
- Rook, K. S. (1987) Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 145-154.